



**KANSAI
UNIVERSITY**

教職支援センター年報

2015

関西大学 教育推進部
教 職 支 援 セ ン タ ー

『教職支援センター年報 2015』目次

投稿原稿

<小論文>

- ループリックを活用した初年次のレポート指導 関西大学文学部教授 安藤 輝次・・・ 1
- 中学校社会科地理的分野における苦手意識の偏在状況と
その改善に向けた提案 京都教育大学教授 香川 貴志・・・ 7

<報告>

- 「アクティブ・ラーニング」の実践からの教員の資質
についての考察・報告 非常勤講師 尾崎 進・・・ 12
- 今、教職を目指す人たちに伝えたいこと－「教職実践演習」
の授業を中心に 非常勤講師 椎口 育郎・・・ 19
- 報告 大学生のための国語教室－国語科教育法の課題 非常勤講師 桝井 英人・・・ 32

<教職支援センター特任教授からの報告>

- 教育実習に関する指導について ～国語を例として～ 特任教授 小野満由美・・・ 38
- 「教職実践演習」についての一考察 その2
－『課題別グループ研究及び報告会』－ 特任教授 北井 宏昌・・・ 44

1. 教員の養成の目標

- 関西大学教職支援センターの基本理念・・・ 47

2. 教員の養成に係る組織

- 教員の養成に係る組織・・・ 48
- 教職支援センター規程・・・ 49

3. 教員の養成に係る授業科目

- 教職に関する専門教育科目および科目担任者一覧・・・ 51

4. 教員免許状の取得の状況

- 各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科・・・ 56
- 介護等体験 参加者数・・・ 58
- 中学校・高等学校教育実習生数・・・ 59
- 教員免許状取得状況・免許取得者数一覧（学部・大学院）・・・ 60
- 教員免許取得までの諸手続き・・・ 67

5. 教員への就職の状況

- 教員採用試験合格者状況・合格者数・・・ 68
- 教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果・・・ 71

6. 教員の養成に係る教育の質の向上に係る取組

- 中期行動計画について・・・ 72

介護等体験事前指導について	73
2 年次生対象「教育実習受講希望者ガイダンス」について	74
3 年次生対象「教育実習ガイダンス」について	76
教員養成フォーラムについて	78
教員採用試験合格者との情報交換会について	80
教職専門科目担当者研究会について	82
教員採用試験合格者壮行会について	83
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～	84
教員採用試験 面接対策セミナー	86
教員採用試験 受験案内一覧	87
教員採用試験対策スケジュール	89
教職支援センター 利用状況	90
教職関係ガイダンス日程	92
教育実習出向指導校一覧	93
教職支援センターと初等教育学専修との連携について	96
教員養成のための豊能地区 3 市 2 町教育委員会との連携協力について	97
 7. その他	
教員免許状更新講習一覧	98
 教職支援センター年報 投稿規程・執筆要領	 99
教職支援センター委員会委員名簿	101

中学校社会科地理的分野における苦手意識の偏在状況と その改善に向けた提案

京都教育大学教授 香川 貴志

I はじめに

中央教育審議会での度重なる議論を経て、次の高等学校学習指導要領において地理歴史科の「地理 A、地理 B」（以下では「地理」）が「地理総合（仮称）」として必修化されることがほぼ確実になった（戸所：2015）。「世界史 A または世界史 B（以下では「世界史」）から 1 科目必修」をうたった学習指導要領の実施以来、「地理」を選択できない高等学校、あるいは理系コースに属する生徒のみ「地理」を履修できる高等学校が増加するのと同調して、「地理」履修率は徐々に低下する傾向にあった。危機感を強めた地理学界は日本地理学会を中心に「地理必修化」を強く訴え続け、その取り組みがようやく次期の高等学校学習指導要領改訂において結実しつつある。そして「地理」必修化のあかつきには、小中高における地理教育の内容を連携させて、「基礎力」、「思考力」、「実践力」の育成を図れるようになることが期待されている（井田：2015、井田：2016）。

「世界史」必修の高等学校学習指導要領が告示されたのが 1989（平成元）年、新入生から実施されたのは 1994（平成 6）年である。すなわち、2016 年現在で最初の実施から 22 年の歳月が流れたことになる。このことが本稿のテーマである中学校社会科地理的分野に与えた負の影響は計り知れないほど大きい。つまり、1994 年入学の高等学校新入生は既に 30 代後半に至っており、この年齢より若い中学校社会科教員には、高等学校時代に「地理」を履修していない者が少なくないと危惧される。

このような教員が中学校社会科において必修である地理的分野を担当した場合、そこで上質な授業ができるのかと問われれば、よほど大学で内容の濃い地理学関連の講義を受講していない限り、それは難しいといわざるを得ない。こうした状況を少しでも改善していくには、10 年研修などで現職教員のリカレント教育を充実させていくことが大切である。

その際、どの単元で生徒の理解が進んでいないのか、つまり生徒たちが苦手意識を持ちやすいのはどの単元なのかを明らかにしておくことが肝要である。そこで本稿では、2015（平成 27）年度の春学期に関西大学で筆者が担当した「人文地理学概説 a」において、受講生諸君の協力のもと実施した中学校社会科地理的分野に関するアンケート調査を分析して、苦手意識が生じやすい単元、および「なぜ苦手なのか」という要因を明らかにする。そして、そこから授業改善に向けての方策を探る。関西大学の他、筆者の本務校を含む 3 大学でも同一内容の調査をほぼ同時期に実施したが、本稿では紙幅の制約から他大学における結果や関連文献の網羅的紹介は割愛する。すなわち本稿では、関西大学の事例に限った分析と考察を行い、比較考察を含めた一層の一般化については別稿に譲る。

II データ収集と問い掛け内容、および回答者の属性

春学期開講の「人文地理学概説 a」において、初回の講義時間を活用し、受講生による協力のもとアンケート調査を実施した。回答のための所要時間は 5 分程度である。

調査項目は、Q1 が中学校社会科地理的分野の好き嫌い、Q2 が高等学校地理歴史科「地

表1 Q4～Q11に示した単元とその主たる内容

質問no.	上段:単元、下段:各単元の主たる内容
Q4	世界のすがた 地球全体規模での地図の図法、大陸の分布、陸半球と水半球、経緯度
Q5	世界各地の人びとの生活と環境 気候に関するグラフの読み取り、気候区分ごとの産業や生活、文化の相違
Q6	世界の諸地域 アジア州、ヨーロッパ州などの個別地域における自然、産業、生活、文化
Q7	世界のさまざまな地域の調査 統計やグラフ、インターネットなどを活用した特定地域の調査分析や相互比較
Q8	日本のすがた 日本の位置、領土や領海・領空、海外との時差、国内の地方区分
Q9	世界からみた日本のすがた 日本の自然環境の独自性や災害対策、日本の人口や産業の特色、日本の資源や貿易
Q10	日本の諸地域 近畿地方、関東地方のような各々の地方ごとの自然、産業、生活、文化
Q11	身近な地域の調査 地形図の読図、新旧地形図の比較、統計や資料を活用した地域調査の方法や実践

(資料) 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領』

理」の履修歴、Q3 がセンター試験での「地理」受験の有無を問うもので、全て選択回答式での問い掛けである。Q4～Q11 は選択式に記述式(記述内容は選択理由を問うもので回答の有無は自由)を組み合わせた形式で、文部科学省(2008)『中学校学習指導要領』を基盤として、表1に示した単元別の好き嫌いとその理由を問うた。好き嫌いに関する設問(Q1とQ4～Q11)では、好き嫌いを「大好き」「好き」「まあまあ」「嫌い」「大嫌い」の5ランクから選択してもらうようにした。

回答には学年と性別を記してから取り掛かってもらった。そこで回答者の属性を学年と性別に関してまとめておきたい。回答者総数は80名で、1回生が29名(男:16名、女:13名)、2回生が34名(男:23名、女:11名)、3回生が5名(男:2名、女:3名)、4回生が11名(男:6名、女:5名)、5回生が1名(男:1名、女0名)である。「人文地理学概説a」は教職科目を兼ねているため、教職を志す受講生も多いと考えられる。

Ⅲ 中学校社会科地理的分野の好き嫌いとセンター試験での「地理」選択状況

既述のとおり、高等学校の地理歴史科で「地理」は現在のところ選択科目である。したがって、その好き嫌いを判別するには、地理的分野が必修である中学校社会科を素材にしなければならない。そこでQ1で中学校社会科地理的分野の好き嫌いの度合いを尋ねた。また、高等学校地理歴史科の「地理」の履修状況、センター試験での「地理」利用(受験)を確認し、これらの相互関係を精査した。その結果は表2に示している。

まず注目できるのは、「まあまあ」を除いた好き嫌いの比較で「大好き」と「好き」を合わせた数が36人(全体の45%、以下同様)で、「大嫌い」と「嫌い」を合わせた16人(20%)を大きく上回ることである。「人文地理学概説a」の受講生には少なからず教職科目としての履修者が含まれており、彼らの意識が高いことも考えられるが、地理的分野を好意的にとらえている者は意外に多いことが明白である。

次に、好き嫌いの各ランクと高等学校における「地理」履修率との関係を観察すれば、高等学校におけるカリキュラム編成の課題が浮かび上がってくる。つまり「大好き」から「大嫌い」に至る5ランク別に高等学校での「地理」履修率を計算してみると、それは69.2%、

表2 回答者の属性 (単位:人)

好き嫌い	履修	センター試験受験の有無
大好き	有: 9	受: 8、別: 0、不: 1
13	無: 4	受: 0、別: 3、不: 1
好き	有: 9	受: 5、別: 3、不: 1
25	無: 16	受: 0、別: 10、不: 6
まあまあ	有: 7	受: 1、別: 2、不: 4
25	無: 18	受: 0、別: 12、不: 6
嫌い	有: 2	受: 0、別: 2、不: 0
13	無: 11	受: 0、別: 11、不: 0
大嫌い	有: 0	受: 0、別: 0、不: 0
3	無: 3	受: 0、別: 3、不: 0
N.A.: 1	N.A.: 1	N.A.: 1
	有: 27	「地理」を受験: 14
総数	無: 52	別科目で受験: 46
80		「地理」を不受験: 19
	N.A.: 1	N.A.: 1

(資料)2015年度「人文地理学概説a」で実施したアンケート

履修欄について

有: 高等学校の地理歴史科で「地理A」または「地理B」を履修した経験がある。

無: 高等学校の地理歴史科で「地理A」または「地理B」を履修した経験がない。

センター試験受験の有無欄について

受: センター試験の地理歴史科では「地理A」または「地理B」を受験した。

別: センター試験の地理歴史科は「地理A」や「地理B」以外の科目で受験した。

不: センター試験は受験していない。

のうち、高等学校では「地理」を履修していない20名は、「地理」履修のチャンスさえあれば大学受験の際に「地理」を選択していた可能性を秘めている。事実、中学校時代に「地理」が「大好き」だった者で高等学校「地理」を履修した9名のうち8名(88.9%)がセンター試験で「地理」を受験し、中学校時代に「地理」が「好き」だった者で高等学校「地理」を履修した9名のうち5名(55.6%)がセンター試験で「地理」を受験している。大学進学率が高い昨今の情勢からすれば、高等学校での学習の多くが大学受験をターゲットにしていることは否定できない。また、好きな科目は往々にして得意な科目でもある。これらから、生徒の好みや得手不得手を高等学校側の事情で制限すべきではないことは明らかである。

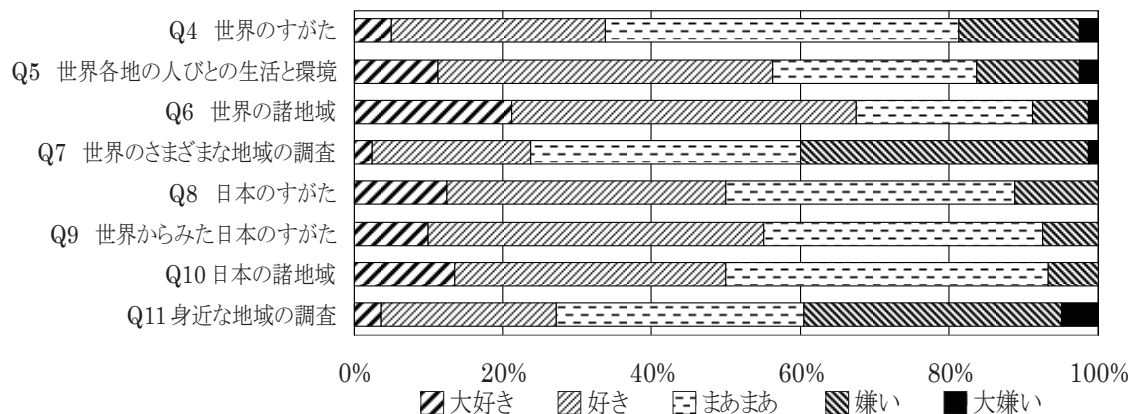
IV 中学校社会科地理的分野における単元別の好き嫌いが意味するもの

「人文地理学概説 a」受講生の協力のもとに実施したアンケート調査のうち、Q4～Q11は、中学校学習指導要領に示された学習項目別に好き嫌いを問うたものである。既述のとおり、回答は全て「大好き」「好き」「まあまあ」「嫌い」「大嫌い」の5ランクから選択するスタイルであり、特筆すべき根拠がある場合は各設問においてそれを付記してもらった。その結果をまとめると図1のようになる。

学習指導要領に示された8領域のうち、最も高い好感度を得たのは「世界の諸地域」で

36.0%、28.0%、15.4%、0.0%の順に低下する。このことは、学習を続ける環境が整っていれば当該科目への好感度が維持され、そうした環境が不十分であれば好感度が低下することを示唆しているといえよう。各々の高等学校の教員配置や個々の教員の授業負担の公平化など、さまざまな理由はあるが、科目開設の有無や履修制限(例えば理系コースしか「地理」を履修できないなど)によって、学ぶ意欲を削いでしまうような事態は、グローバル時代における人材育成や国益確保の観点からも絶対に避けるべきである。

学ぶ意欲を維持していく課題は、センター試験での「地理」受験の有無でも裏付けがとれる¹⁾。つまり、センター試験の地理歴史科で「地理」を受験した者の全てが高等学校で「地理」を履修しており、逆に「地理」の履修経験が無く「地理」を受験した者は皆無である。このことから未履修科目で大学受験に挑むことの障壁の高さが分かる。とりわけ中学校時代に社会科地理的分野が「大好き」か「好き」だった者38名



(資料) 2015年度「人文地理学概説a」で実施したアンケート

注) Q4～Q11の詳細については既出の表1を参照。

図1 領域別にみた好き嫌い各ランクの構成比

あった。この領域では「大好き」が20%を超え、「好き」を合わせると比率は70%近くにまで達する。「大好き」あるいは「好き」と答えた理由の多くは「知らない土地の様子を知ることが楽しい」という未知の地域への興味・関心や憧れによるものであった。

他方、こうした興味・関心とは裏腹に「世界のさまざまな地域の調査」では40%の受講生が「嫌い」または「大嫌い」と回答している。その理由で最も目立つのは「統計分析やグラフの解読が苦手」という回答である。この結果から推察されるのは「未知の地域への興味・関心はあるが、資料を駆使して分析検討するのは難しいし面倒である」という受講生の一般像である。実社会ではあらゆる職種で業務改善のために地域分析が不可欠である。また、未知の地域への興味・関心が皮相的なものに終始すれば、珍しいものを観たいという欲求が当該地域への深い理解や貢献にまで発展することは期待できない。グローバルマインドを持った人間形成のためには、楽しみながら地域分析の能力を身につけられるような工夫を早急に講じなければならない。

さらに「身近な地域の調査」も「世界のさまざまな地域の調査」と同様に好感度が低くなっている。加えて「大嫌い」という回答の比率が全領域の中で最高値を示している。「身近な地域の調査」においても「統計分析やグラフの解読が苦手」という付記が少なからず認められた。しかし、それ以上に目立ったのが「地形図の読図が苦手」あるいは「地形図が読めない」に類する回答である。統計やグラフが主に定量的要素から構成されているのに対し、地形図には定性的要素が多く含まれており、正確な読図には地図と地域観察を照合した経験等に基づく相応の地理的センスが要求されるといっても過言ではない。しかし、一方で細かな暗記はほぼ不要である。読図の基礎を固めることさえできれば、地形図の読図は決して難しい作業ではない。

したがって、「身近な地域の調査」において多くの受講生の好感度が低い根源には、読図の基礎技能を的確に教えられる教員の絶対的不足があると懸念される。大学の入学試験、とりわけセンター試験において地形図の読図を中心とした地域調査に関する出題が頻繁になされることを踏まえて、高等学校地理歴史科の「地理」では読図演習が少なからず実施されていると推定される。しかし、こうした経験を積んでいない高等学校「地理」未履修

者が中学校社会科の教員となった場合には、当該教員に卓抜した地理的センスが備わっていない限り、地形図の読図に関して適切な指導を期待することは難しい。実際、冒頭で取り上げた井田（2015）では、地図を正しく読めない教員の多さが憂慮されている²⁾。「身近な地域の調査」への好感度が低くなるという「負のスパイラル」は、かかる構造的問題のもとに拡大してきた。

中央教育審議会による高等学校地理歴史科の「地理」必修化は、大学受験での「地理」利用の促進という些末な枠にとどまらず、各人が市民社会において地域貢献を果たしていく基盤の形成という大切な役割を見据えたものとして高く評価できる。今後は絶対的に不足することが必至の地理担当教員の質的向上が喫緊の課題となる。大学等の教育研究機関に対し、教育職員免許更新講習会（10 年期講習会）において従来以上の真摯な取り組みが要請されることは言うまでもない。

「地理」が決して暗記科目ではなく、地域分析を通じた地域理解のための科目であることが広く認知されれば、小学校社会科の地理的な単元、中学校社会科の地理的分野、高等学校地理歴史科の「地理」、そして大学や大学院での地理学の全てにおいて、地理や地理学の裾野拡大とボトムアップが可能になる。1994 年以來の失われた 20 数年は余りにも長い、その克服に向けて地理（地理学）教育に携わる者は改めて自身の教育活動を顧み、そしてそれを改善していく必要がある。

- 1) 関西大学では、この調査を実施した「人文地理学概説 a」の受講生の多くが千里山キャンパスにある学部の学生であるが、文系学部の全てにおいて地理歴史科の受験科目で「地理 B」を選択できる。つまり学部独自入試とセンター試験を同一科目で受けやすい環境が整っており、国公立大学との併願が珍しくないと想定できる。事実、センター試験を受けていない者の総数は 19 名（23.8%）に留まっている。
- 2) 大会当日の特別研究発表においては、とくに地形図の読図ができない教員の多さが強調され、文学作品に登場する記述内容を地形図上に記入する作業の実演があった。壺井榮の作品『二十四の瞳』に登場する女性教員（大石先生）の自転車での通勤経路をたどるというもので、楽しみながら学べる工夫に触発された聴衆も多かったと思われる。

文 献

- 井田仁康（2015）「高校『地理』の動向と今後の地理教育の展望」、『人文地理学会大会発表要旨集』2015 年版, 10-13 ページ.
- 井田仁康（2016）「高等学校『地理』の動向と今後の地理教育の展望」、『人文地理』、第 68 巻、第 1 号、66-78 ページ.
- 戸所 隆（2015）「高校『地理総合（仮称）』新設・必修化の意義と今後」、『地理』、第 60 巻、第 10 号、61-65 ページ.
- 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領」東山書房.